

[講演会抄録]

2009年度連続研究講座：グローバリゼーションが変える？“世界像”

第1回「グローバリゼーションが変える？世界と日本」

2009年5月21日

伊豫谷 登士翁（一橋大学大学院社会学研究科教授）

伊豫谷：連続講座の全体のテーマは、「グローバリゼーションが変える？世界像」であり、「変える？」と疑問形になっています。はたしてグローバリゼーションと言われているものは、これまでの政治や経済あるいは文化や社会の在り方を変えてきたのか。変えてきたとすれば、何をどのように変えてきたのか。そしてそれは人びとの世界に対する物の見方、認識枠組みや世界像を転換してきたのか、といった問いです。

このような問いの背後には、私たちが、いま、大きな変化に晒されてきているという共通認識があります。「いま」という言葉は、日本語では近代に対して現代と表現することがあります。グローバリゼーションというのは、現代が近代のたんなる延長ではなく、新しい時代へと移りつつある、という認識を表現した言葉でもある。政治や経済だけでなく文化や歴史学、人文科学といわれる分野においても、「グローバリゼーション」という言葉が使われ、それをキーワードにしながら、「いま」の変化を解き明かそうとしてきています。

グローバリゼーションを理解するということは、たんに現代といわれる時代に起こっているさまざまな出来事を明らかにするだけでなく、

出来事を捉える枠組みそのものを問い直す作業でもある、というのが報告の主旨です。今日は、グローバリゼーションとはいかなる拮かりを持った問題領域であり、そのことをテーマにすることによって、私たちの世界像をどのように転換してきているのか、について話をしたいと思います。本論に入ります前に次の二つを確認しておきます。

第一は、グローバルな課題とグローバルでない課題があるのではなく、あらゆる課題がグローバルな課題として表れてきている、という点についてです。例えばグローバリゼーションをテーマとする国際会議で論じられる環境問題であっても、ローカル、リージョナルあるいはナショナルな問題として立てられる場合もあり、グローバルな問題として論じられる場合もある。グローバルな課題として問題にするのか、それとも、ナショナルな課題として問題にするのか、というのは方法の問題です。環境や紛争などの特定の課題だけがグローバルな課題であるわけではなく、あらゆる課題をグローバルな観点から見ていく必要があります。重要なことは、環境や貧困や紛争といった問題だけがグローバルな課題であるのではなく、グローバルな観点から見ていくとはどういうことなのか、ということ問い続けることです。

第二は、グローバリゼーションという言葉は、流行語やバズワード（人を惑わす言葉）ではなく、現代という時代を映し出す言葉である、という点です。グローバリゼーションという語は、きわめて多様な使われかたをしており、時として、新しい事象に対してグローバリゼーションという言葉を使うことによって了解可能にしてしまうことがあります。これではこの語を使う意味はありません。グローバリゼーションという語を使うことによって、新しい観点を切り拓くことが重要です。たとえば、「ジェンダーとグローバリゼーション」というように問題を立てることによって、これまでジェンダー研究では論じられなかった課題が浮かび上がってくるのです。

グローバリゼーションという語は、1980年代の後半ぐらいから使われるようになり、冷戦体制の崩壊以降に盛んに論じられるようになり、21世紀に入って一般的に流通するようになってきました。グローバリゼーションは、20世紀の残したさまざまな課題を引き継いできたのです。その課題とは何であるのか見ていきましょう。歴史家であるホブズボウムは、『極端な時代』のなかで、20世紀を、二度の世界戦争に代表される大量殺戮と人類がこれまで経験したことのない高い経済成長の、二つの「極端」な出来事によって特徴づけています。

大量殺戮を引き起こした世界戦争は、西洋近代の逸脱としてあるのではなく、近代合理性の帰結であり、人類の発展のいわば理想として掲げられてきた西洋近代が崩れてきたことを意味します。人類の歴史の発展として描いてきた歴史意識の崩壊でもあります。さらには、人類を滅亡させる兵器の開発は、技術への懐疑も生んできたでしょう。

もうひとつの高度成長はこれまで経験したことのない豊かさを実現し、人類は初めて飢餓から解放されたと言っています。もちろん、飢餓が地球上から無くなったということではなく、正確には飢餓が社会変革の槌として働かなくなったということです。ホブズボウムはその豊かさを無条件に歓迎しているわけではない。飢餓への恐怖はこれまで人類のさまざまな秩序、組織を生み出してきた。例えば、家族であるとか、共同体であるとか、国家であるとか、そういう組織がある一定の秩序に基づいて支えられてきた。それらを支えるあり方は、もちろん、飢えへの恐怖だけではないのですが、飢え＝死への恐怖は、組織そのものが長期に維持された一つの大きな要因であり、豊かさへの渴望であっただろう。人類が飢餓への怖れから解放され、豊かさを手に入れたならば、果たしてそういった組織が維持できるのだろうか。もう維持できなくなって来ているのではないかと。グローバリゼーションというのは、まさにそういった課題というものを抱えて出てき

ているということでもあります。

20世紀をこの世界戦争と高度成長によって特徴づけるとするならば、そうして創り出された体制の大きな転換としてグローバリゼーションの時代はあります。Z.バウマンは、グローバリゼーションを次のように定義しています（Z. Bauman, *Globalization. The Human Consequences*）。「グローバリゼーションは、人々の日常にのぼる言葉である。決まり文句になった一時的な流行語であり、人を惑わす呪文であり、現在並びに将来の神秘の門を開く合鍵である。ある人にとって、グローバリゼーションは幸福になりたいければそうすべき対象であり、他の人たちにとっては不幸の原因でもある」。それに続けて「すべての人たちにとって、グローバリゼーションは、手に負えない世界の運命であり、不可逆的な過程である。」すなわち、グローバリゼーションとは選択の問題ではなくて、われわれが否応なくそこにいる、いまは「グローバリゼーションの時代」だと認識すべきである、ということです。そして、グローバリゼーションとは、「統合」と「分散」の二つが密接に結びついた過程であり、「ある人々にとってグローバリゼーションとして現われてきていることが、他の人にとってはローカリゼーションを意味する」過程である、と。グローバリゼーションとローカリゼーションというのは、しばしば対立するように捉えられる、あるいはグローバルとナショナルとは対立するように捉えられるが、両者はメダルの表と裏として表れている、と述べています。

日本においては、グローバリゼーションという言葉は、しばしば「国際化」と平行して使われてきました。国際化に対してグローバル化という言葉が頻繁に使われるようになってきたのは1990年代の半ば以降です。国際化は、ある意味で、日本の企業が外に出て行ったり、日本の人々が観光とかで外に出て行ったりするときに使われてきた。最初は、国際化と同じような意味でグローバル化という言葉が使われて

きたわけですが、ところが、93年のいわゆるバブルの崩壊以降になると、グローバル化というのは否定的な意味で使われることが多くなってきました。グローバル化は、いわば外からの押し付け、外圧として使用されることが多くなってきた。和製英語で「グローバル・スタンダード」という言葉がありますが、世界的な標準化が日本に押し付けられるような事例としてグローバル化という言葉が使われてくる。

グローバリゼーションがネオリベラリズムと同義のように使われ、それへの対抗が問題となってきたのは、むしろ発展途上国と呼ばれてきた国々においてでした。民営化や規制緩和は、先進国に先行して、発展途上国において行われてきたからです。膨大な累積債務を抱えて、国際通貨基金などの構造調整を受け入れて、財政の健全化を強制されてきたのです。グローバル化は、とてつもない力として個々の地域や国に浸透してきており、それに対抗する場をどう考えていくのか、という課題が大きなテーマとして表れてきました。そのひとつは、ダボス会議に対抗した世界社会フォーラムなどの反グローバリゼーションの運動です。グローバリゼーションに対抗する運動もグローバルな形で展開されてくる。グローバリゼーションとはたんに巨大な資本の動きだけではなく、グローバルな標準化の押し付けによる国家機構の再編、それに対抗する反グローバリゼーションの動きも含めた形で展開しており、グローバリゼーション研究はこうした動きをも含めた、現代という時代を捉える枠組みとして理解できるのであり、その一つの事例として「批判的グローバリゼーション研究」を考えることができます。

アッペルバウムとロビンソンは、彼らの編著 (R.P.Appelbaum & W.I.Robinson eds.(2005), *Critical Globalization Studies*) の序文で、「グローバル・スタディーズ」を次のように定義しています。「(1950年代に流行した国際を冠した学とは区別される) グローバル・スタディー

ズは、世界を、個々の国民国家の相互作用としてではなくて、単一の複合的なシステムとして捉えている。グローバル・スタディーズは、国際関係よりは、国境を越える、トランスナショナルな過程、複合的作用、フローに焦点をあてており、出現しつつある越境的な現実によって生み出される一連の理論的、歴史的、認識論的、そしてさらには哲学的問題に取り組んできている。」彼らの議論は、グローバリゼーションを現代に起こっている出来事だけではなく、それを認識する思想や哲学を含めた方法的な問題と考えています。私も、グローバリゼーション研究は、政治や経済、文化、社会のさまざまな分野で起こっている変化を捉える「事象としてのグローバリゼーション」、これまでのナショナルな境界を暗黙のうちに所与としてきた認識枠組みの転換である「方法としてのグローバリゼーション」、そして近代とは区別される時代の歴史認識を問い直す「時代としてのグローバリゼーション」の3つのレベルで考えていく必要があると思っています。

グローバリゼーションを研究するということは、一義的に定義されるものではなく、またテキストのような形で体系化されるものでもない。さまざまなレベルで考える複数のグローバリゼーションに、ひとつひとつ、取り組んでいくことが必要となります。言うなれば、知の組み替えの作業です。もちろん、知の組み替えには膨大な時間と労力が必要であり、そのことは大学のあり方をも変えるようなことになるかもしれません。そして新しい認識枠組みを作り出す努力も必要とされます。そういった試みのひとつに、バーネットとカバナーの二人が書きました『グローバル・ドリーム』(R. Barnett & J. Cabanagh, *Global Dreams. Imperial Corporations and the New World Order*) という本があります。バーネットは、かつて『地球企業の脅威』を書いた有名なジャーナリストで、これは多国籍企業論として優れたものでした。そして、『グローバル・ドリーム』は、私がグローバリゼーション

に関心を持つきっかけとなった本です。

彼らは、巨大企業の経営者や政治家などにインタビューをしまして、その中から時代の動きを捉える枠組みや言葉を紡ぎ出していきます。すなわち、あらかじめ理論的な枠組みを最初から固定的に捉えるのではなく、課題から理論的な枠組みを再構成しようとしています。ただし言うまでもなく、こうした方法を採用するのは、彼が理論的な訓練を十分積んでいるからでもあります。これは、今風に言えば、エスノグラフィーの手法、しかも良質のエスノグラフィーの手法に基づいて現代世界の動きを捉えようとした本です。そこで彼らは、グローバリゼーションが創り出す空間を次のように捉えています。

「マンハッタンのアッパー・イースト・サイドにあるpenthouse・アパートに住む住人は、嗜好やスタイル・習慣・外観によって、ブリュセルやリオ、東京の同じような地域に住む市民達と密接な関係の中に引き込まれ、ほんの1・2ブロック離れたところに住む貧しく余り移動しない人々からは益々遠ざかるのである。」すなわち、具体的な生活の場によって構成されてきたローカルな場が解体し、国境を超えて空間が再編成される。あるいは空間的に統合された場が、政治や経済、さらには具体的な生活の場を分断していく、ということになります。それゆえに、一方ではグローバル・シティのようなネットワーク化した世界都市の結びつきが生まれるとともに、低賃金労働者達が住む地域は、国際労働力移動を通じて接続するのです。ヴァーチャルな空間の拡がりガリアルな場所を解体する、と言い換えることもできます。

しかしその結果として、「数十億の人々は、生活に意義を与えてきた場という感覚、自己という感覚を失ってきている。新たな世紀を告げる十年間における基本的な政治的紛争は、国家（nations）間あるいは貿易ブロック間でさえなく、グローバリゼーションの勢力と共同体を

維持し再定義しようとする領土的基盤を持つ地域生存の勢力との間にあるであろう、と思われる」、と。グローバリゼーションというのは、たんに空間の再編だけでなく、対立図式のものも再編されることになります。そこでは、東西冷戦だけでなく、これまでのような南北問題は溶解し、南の中に北が、北の中に南が表れることになります。

こうした世界の経済や政治を動かしている巨大企業は、次のように捉えられます。「1990年代において、巨大企業は、そしてある種の小企業でさえも、——時間・空間・国境・言語・習慣・思想といった——かつての限界を突破する技術的手段と戦略的観点を有している」、続けて、「多国籍企業という制度は、21世紀の世界帝国となりつつある。これら宇宙時代の企業の設計者や経営者は、世界政治のバランス・オブ・パワーが、近年においては、領土に縛られた政府から世界を放浪しうる企業へと移行した、と考えるに至っている」と言っております。

ここで注目すべき点は、次のことにあります。経済のグローバリゼーションは、一般的には多国籍企業や巨大銀行による世界的な統合化として理解されてきました。それは1960年代から70年代に起こってきた事態で、国際経済の中の主要問題として多国籍企業が盛んに論じられた。多国籍企業の発展途上国への進出による巨大企業の世界的な統合化がこれまでの世界経済の構造を変えるものとして注目され、その延長上で経済のグローバルリゼーションが取りあげられるようになった。しかし、1990年代以降になると、バーネットらの言うように、これまでの多国籍企業とは違った観点から捉えざるを得なくなってきている。そしてそれは、たんに多国籍企業の変化と言うだけではなく、政治や経済、文化などを含めた大きな変化となって表れてきている。バーネットとカバナーらの仕事から導き出せる結論が二つあります。ひとつは、60年代70年代における経済のグローバル化の水準が、80年代90年代には大きく転換したということです。グローバリゼーション

はひとつの静態的な構造としてではなく、次々と展開していくような過程としてあるということです。もうひとつは、グローバルな統合化がさまざまな地域（ローカルな場所）を作り替え、その具体的な場所での政治から文化や社会といわれてきたものを組み替えてきている、ということです。

グローバリゼーションは均質な空間を一元的に創り出すわけではありません。一方ではマクドナルド化と言われるようなファストフードの世界的な展開をもたらします。またさまざまな地域の文化を「遺産」として見せ物にしてきます。さらには、ローカルな食をエスニックフードとして消費するでしょう。しかしそれは、「同じ音楽を聞くこと、同じくグローバルに配給されたゲームで遊ぶこと、同一のグローバルな放送を見ることは、人々の個人的あるいは集団的な感覚を変えるものではない。」ということです。グローバル文化は、国境を超えた階層化された空間を通じて、共通経験を世界的な規模で拡散しながらも、そこに共通感覚を生み出すものではない。そしてそうしたただら模様のヴァーチャルな空間と具体的な場での展開を、政治だとか、法だとか、経済だとか、社会だとか、文化だとか、さまざまな領域を一つひとつ明らかにしていく、それがグローバリゼーション研究であり、グローバルな枠組みから物ごとを捉える方法を身につけると言うことです。

しかしグローバリゼーションと呼ばれる事象は、諸分野において異なった様相で表れます。経済では、世界的な生産の統合化から金融ネットワークに至るグローバル資本の展開として捉えられるでしょうし、政治においては、ネオリベラリズムの浸透や主権国家の変容として表れてきました。文化では、マクドナルド化やポピュラー文化の拡がりならびにグローバルメディアなどが重要でしょうし、社会では移民や越境家族などが問題として取りあげられてきました。これらをグロー

バリゼーションの時代と言うのは、ほぼ同時代的に、あるいは時代の転換として考えるからであり、その転換を論じるには、これまでのナショナルな枠組みを転換しなければならない、ということです。

最後にいまのもっとも関心の高い問題のひとつを取りあげて、グローバルに考えることとはどういうことであるのか、そしていまの変化において何が重要であるのかを考えてみたいと思います。現在の日本でグローバル化が問題にされるとき、しばしば「格差社会」と結びつけて議論されています。格差社会の問題は、しばしばグローバル化を外圧のような扱いで取りあげてきたように思います。また、かつての福祉国家のような一国的な枠組みのなかで議論されてきました。しかし、ここでは格差問題をグローバルな観点から取りあげることにします。この20年ほどの間に、世界的な規模で雇用の不安定化が浸透し、日本においても失業やホームレス、フリーター等が取りあげられてきています。格差社会が多くの人たちにとって深刻な問題であることは確かです。その原因として、雇用形態が大きく変化してきたということがあります。

クリントン政権で労働大臣をやったロバート・ライッシュは、『勝者の代償』という本において、グローバル化は勝者と敗者を作り出すが、勝者といわれる人々も絶えず走り続けなければならない、走るのを止めた時、彼は敗者に転落してしまう、と書いています。彼自身は勝者であり、それを維持するには多くの犠牲を払ってきた、と述べているのです。しかし問題は、なぜそのような時代になったのかという点であり、それを論じている箇所を引用します。

「唯一の正当な価値尺度は、何が求められているかであり、その最良の指標は売上げである。・・・専門的、芸術的な誠実さのための余地はわずかとなる。」

「長い歴史で見れば安定雇用という概念はむしろ新しいものであり、そしてそれは結果として短命なものであったということだ。安定雇用は、大規模生産時代の一世紀半の間、アメリカやその他の先進工業国で繁栄し、今や終わりを告げようとしているのである。」

「基本的な現実とは、所得階層の底辺での仕事によって支払われる報酬が、働く女性と彼女の子どもの生活を支えるのに十分ではなく、例え彼女が同じ様な所得階層の底辺で働いている男性と同居して生活費をシェアしたとしても、事情は変わらないということなのである。……大部分の福祉貧者が、今は就労貧者になっただけである。」

「専門的、芸術的な誠実さのための余地はわずかとなる」とはどういうことなのでしょう。たとえば、研究者の価値とは世の中に受け入れられるか、によって決まる。極端に言えば、どれだけ本が売れるかだとか、論文がどれだけ多く読まれているか、ということが判断の基準になる。重要な専門書がベストセラーになることは希ですし、非常に高度な専門書は、恐らく数えるほどの人しか読まないでしょう。別の事例で言えば、展覧会の展示の善し悪しが観客の動員数で判断される。したがって、展覧会は印象派や浮世絵ばかりになる。価値尺度の市場化によって、価値が歪められてきている、というわけです。

雇用に関しては、安定雇用は、大規模生産時代の一世紀半の、限られた国での雇用形態に過ぎないとしています。彼は現在の雇用問題を冷徹に捉えているのです。人びとが当たり前だと思ってきた雇用の安定性は、たかだかこの100年ぐらいの、しかも先進国と呼ばれた国の中で、しかも一部の人びとに保障されていたに過ぎないのです。安定雇用は、資本主義全史から見た場合に、非常に特別な雇用形態であったということです。そうした流れを念頭においていまの格差問題の取りあげ方をみた場合、次の二つの点から問題を指摘することができると思います。

第一には、格差として論じられている何が問題なのかという点です。格差が問題にされ始めたのは、アメリカでもそうですが、いわゆるメインストリームの男性がリストラされた時であったということです。もちろん、それ自身は大きな問題であることを十分認めた上でですが、アメリカで言えば白人の男性がリストラされて初めて格差が大きな問題にされてきた。それに対してフェミニストの人から痛烈な批判が出されたわけです。女性はもともと不安定な雇用におかれてきたし、低い賃金でしかなかった。さらに、黒人を含めたマイノリティの人たちは、昔から権利が制限されてきたし、さまざまな形で雇用の場で差別されてきた。だから、格差社会論というのはいわゆるメインストリームの問題として立てられてきたのではないか。

さらに、格差社会だとか、グローバル化によって職が失われるとかの問題は、先進国の問題として提起されてきたのではないか、という批判があります。世界全体を見れば、資本主義の歴史において、はるかに不安定な雇用の方が多いわけです。例えば、発展途上国と呼ばれているような国々では、しばしばインフォーマル・エコノミーでの雇用が圧倒的に多く、不安定な雇用が、むしろ中心であった。そういう地域にとってのグローバル化というのは決して格差問題ではないだろう。あるいは、こうした地域は、もともとグローバルな競争の犠牲になってきたのであり、それがいまは拡大してきているということになります。先進国での所得の減少が、途上国からの低価格品の輸入によって支えられ、そのことが途上国の中での不安定雇用を増加させる。そして途上国の不安定雇用依存した産業へと生産立地が移動することによって、先進国の雇用がますます不安定になる。これは、たぶん、かつての安価な資源を植民地に依存してきた帝国主義と同じメカニズムでしょう。

すなわち、格差問題はメインストリームの問題に偏って議論され、

先進国のナショナルな枠組みで取りあげられ、展開されてきたのである。繰り返しますが、現在進行している格差がたいした問題ではない、と言っているのではありません。しかし、それをグローバルな課題として捉えるならば、ジェンダーやレイシズムの問題として、そして世界的規模の問題として取りあげることが必要になります。ただし、こうした格差の問題は、何も新しい問題ではない。何が新たな課題として立ち現れてきているのか、見ていく必要があるでしょう。そしてそこには、格差として立てられてきたよりは、はるかに深刻な問題を現代世界が抱え込んできているのではないかと考えられるのです。

「深刻な」と言う意味は、近代世界のあり方を揺るがすような、と言う意味です。そこで念頭においているのは次のようなことです。たとえば、年末に行われているテント村や炊き出しのボランティアをやってきた人の話ですが、結構若い人がやってくる。彼には、親や兄弟がいるのですが、そことはほとんど縁が切れているという印象を受ける、ということです。世界的にもホームレスといった人々が急増している。そこで起こっていることは、人々を支えてきた共同性あるいは社会が、大きく崩れてきているのではないかと、言うことです。あるいは近代社会や資本主義を支えてきた生存基盤が崩壊してきた、と思っています。

私はこれまで現代の人の移動をどのような枠組みで捉えられるだろうかと考えてきました。近代の移民は、基本的には、帰るべき場所を持っていた。ただし、成功すれば戻らないし、失敗すれば戻れないのですから、実際に帰るかどうかは別の問題です。それにもかかわらず、私の故郷、帰れる場所を想像し、創造してきた。戻るべき場所とは、本来、自分の居るべき場所と言うことです。それは、「居場所」という言葉で表現できるでしょう。したがって、近代移民の典型的な形は、しばしば「渡り鳥 (bird of passage)」(Piore) と表現されます。日本語

では、農村から都市への「出稼ぎ」ということになります。移民とは、ある場所から別の場所への移動であり、場所作りとして考えられる。移動するとは一時的なことであり、場所に留まることが、本来のあり方である、ということになります。しかしながら、ここ数十年間の移民、特に発展途上国と呼ばれている国から先進国へ移動して来ている人々は、戻るべき場所を失ってきているのではないかと考えるようになってきました。人々がそこに戻れば自らの生存が保障される、そういう場所が次第に崩壊してきた。もちろん、現在でも移民へのインタビューなどでは、故郷に戻る、あるいは戻りたい、といった結果が出ます。

これは人の移動から捉えた場合の話ですが、はたして移民研究の中だけの問題だろうかと思っています。故郷の喪失は、そして居場所の崩壊は、世界的な状況として進行しているのではないのでしょうか。あるいは人びとにとっての場所が大きく変化してきているのではないだろうか。格差社会を考えると、そこでのより根源的な問題は、格差そのものの拡大よりは、人々の居場所の喪失ではないか。そしてそれは、グローバルな規模での変化の中で、人びとが居場所を失ってきたということでもある。

これに対してどのような対抗的な運動が可能かという問いに対して安直な結論は出せませんが、二つほどの事例から論点を導き出したいと思います。ひとつは、去年、友人にパリを案内してもらい、ホームレスによって占拠されている中心部のビルを案内してもらったことについてお話したいと思います。パリでは、こうしたホームレスによる不法占拠が多く、そのことは日本の新聞でも報道されました。面白いのは、不法占拠の哲学というのでしょうか、政府は住居を保障する義務があり、空きビルであるならば、我々には基本的にはそこに住む権利がある、という主張であり、それを多くの人たちが支持していると

ということです。いわゆる不法占拠している人々の多くは移民でしょうが、不法占拠という形でコミュニティが形成され、その形成を通じて移民とパリの市民とが繋がっているということでもあります。

もう一つは、ガッサン・ハージーが彼の新しい本（『パラノヤ・ナショナリズム』）の中で展開している事例です。彼はオーストラリアの研究者で、この本の中でレバノン人移民を取り上げています。その移民は精神的な疾患をかかえていて、弟がレバノンから迎えに来たが、国には戻りたくないと言います。その拒否の理由は、オーストラリアには、私の好きな場所がある、という言い方をするのです。その場所とは、横断歩道です。横断歩道を渡るときは、車が止まってくれる、というわけです。私の声を聞いてくれる場所がオーストラリアにはある、ということです。これはもちろん、比喩です。人びとの声が届く場所をどのように作り出せるのか。言い換えるならば、そういう場所が失われてきている、というのが現代の状況である。格差というのは、たんに所得格差だけではなく、空間の拡大が具体的な場所を崩壊させつつあること、そしてそれはこれまでの場所の再興ではあり得ない、といった点にまで及んで問題化していくべきことでしょう。グローバリゼーションとは一体何であって、それを自分がどのように受け止めて、問題を考えていくのか、それこそが自分がやるべきことではないのかと、私は思っております。